

式年遷宮記念 せんぐう館初代館長、神宮禰宜 小堀 邦夫氏に聞く

聞き手 山岡 三子 ●フリーアナウンサー・名古屋短期大学客員教授

山岡 本日は、神宮禰宜という重職にある小堀邦夫さんに、お話を伺います。

小堀さんは皇學館大学大学院で国史学を、昭和五十二年に神宮に奉職されました。そして現在では、神宮外宮の勾玉池のほとりに平成二十四年四月に創設された「せんぐう館」の館長も、お務めになつていらつしやいます。

伊勢神宮では、平成十七年より進められてきた第六二回神宮式年遷宮がまさに佳境を迎えています。別宮の遷御はこれからとはいえ、今年（平成二十五年）の十月には、その中心的儀式として、皇大神宮（内宮）、豊受大神宮（外宮）で「遷御の儀」が行われました。

神宮式年遷宮は二二〇〇年続く わが国最大のお祭り

小堀 神宮式年遷宮とは、「新しいお宮を建てること」「御装束神宝を奉納すること」「遷御のお祭りを行うこと」という三つの柱で成り立つ、わが国最大のお祭です。このお祭りが何よりも貴重なのは、飛

鳥時代後期の持統天皇四年（六九〇年）に第一回が行われて以来、一三〇〇年にわたつて繰り返され続けていることにあります。
山岡 一三〇〇年という時間の重みを考えると、いかにこのお祭りが尊いものであるかがわかります。

こうしてお話をお伺いする前に、外宮のご正宮に参拝させていただきましたが、平日の午前中にもかかわらず、大勢の方が参拝されていました。

特に今は「遷御の儀」が行われた直後ですから、古い社殿と新しい社殿の両方を拝見することができ、ひととき感慨深いものがありました。

小堀 松尾芭蕉の句に「尊さに皆押しあひぬ御遷宮」というのがあります。遷宮に接した民衆が、竹矢来を踏み越えて、殺到した様を詠んだ句です。それと同じ状況が今まさに神宮で見られ、今年の一月から十一月までの参拝者は一二〇〇万人にも及んでいます。

新しいお宮に神様がお遷りになって、神様も一層若やいでお元氣になられた。そのお姿を拝見したいという人々の思いは昔も



小堀邦夫氏（左）と山岡さん

（2013年11月14日 式年遷宮記念 せんぐう館にて）

今も変わりません。

建築を通して

精神文化の永遠性を考えれば

山岡 二〇年に一度、社殿を建て替え、

神宝類も新調して大御神に新宮へお遷りをいただくという神宮式年遷宮の伝統は、他国には見られない日本独自のものと言えると思います。そもそもなぜ、このようなお祭りが行われるようになったのか、非常に興味が沸きます。

小堀 どの民族、どの文明においてもそうですが、人は生まれては死んでいく運命に必ずありますから、自分たちの精神文化をどのように伝えるか、それをいかに永遠性の中にとどめるかという問題が起きてきます。そうした課題に取り組んだ結果は、とりわけ建物の建築に濃厚に出てくるものです。

ヨーロッパでは、堅固な石造建築によってその永遠性を表そうとしました。実際、パルテノン神殿を造ったときには、これで自分たちの精神文化を表現できるだろう、永遠性を実現できるだろうと考えたはずで

す。しかし、いくら堅牢な建物でも、時を経れば必ず廃れます。あのベルサイユ宮殿でさえ、いつかパルテノン神殿のように壊れてしまふ可能性は誰にも否定できないと思います。もちろん、壊れたとしてもまた同じものを新たに造ることはできますが、その根本にある考え方までは再現できない。ここに大きな問題があるわけです。

しかし、日本の場合は、木と土で生活空間をつくりだしてきましたから、建物は建て改めるものだという考え方がもともと基本にありました。この考えが色濃く出ているのが「祭場」です。

どのお社でも、年に一度はお祭りを行います。古代ではそのたびごとに、すがすがしい祭場を新たにこしらえました。こうした営みは、水田農耕を軸とするわが国の文化の特徴と言えるでしょう。それをそのつど繰り返しることによって、永遠性を実現しているのです。この点がヨーロッパの直線的な永遠性とは、大きく異なるところです。

山岡 この神宮式年遷宮にも、その伝統が受け継がれているのですね。

小堀 ええ。さらに、これは伊勢神宮特

有のお祭りのように思われがちですが、かつてはそのほかの神社でも行われていました。平安時代にまとめられた『延喜式』にも「摂津の国の住吉、下総の国の香取、常陸の国の鹿嶋等の正殿は、廿年に一度改め造り、その料は神税を用ひよ」とあります。やがて武家の台頭によって、古代の仕組みが崩壊し、伊勢神宮だけが原初のままを継承することになりましたが、二〇年に一度お宮を造り替える、式年遷宮の考え方は非常に日本的なものでした。

山岡 お祭りが行われるたびに、それにあふさわしい空間を新たに作る。その変わらぬ行為の繰り返しの中に、永遠性を実現してきたというわけですね。そう考えると、神宮式年遷宮もそうですが、お祭りを継続的に行うところにこそ、日本文化の特徴があると考えられますね。

精神の伝統を伝える根底にあるのが「奉る」という行為

小堀 そのとおりです。日本はお祭りを行うことで、貴重な精神の伝統を伝えるようとしてきました。その根底にあるのが、

「奉る」という行為です。

神宮式年遷宮も、神宮の社殿や神宝類を奉るお祭りですし、そもそも伊勢神宮では毎日、神様に対して御饗を奉っています。お祭りの原義は奉るにあるのです。

山岡 その奉るという行為の背景にあるものは、神様に対する感謝の気持ちと解釈してよろしいのでしょうか。

小堀 それもありますが、それだけではありません。例えば、伊勢神宮のお祭りの中でも特に重要なものに神嘗祭があります。これは、一般的にはその年の豊作に感謝して、神様に初穂を奉るお祭りであると説明されますが、それだけでは不十分です。

古代では、奉納する稲穂のことを「ちから」と呼び習わしていました。漢字を当てると「税」です。当時は、稲を中心に麦、黍、稷、菽などが、国司などの役所に納められ、倉で保管されていました。このように穀物をストックした状態を指すのが「ちから」です。

同時にこの「ちから」には、文字どおり「パワー」という意味もありました。「力」という漢字が当てられたのです。

つまり、国語の「ちから」には、租税と

なる穀物資源という意味に加え、資源を使ったときに生じる力も意味していたわけですね。物理学の質量保存の法則と同様に、資源とエネルギーはイコールというわけです。

神嘗祭では、神宮の玉垣に稲束を懸ける「懸税」という行事が行われます。これは神々に「力」を捧げる営みにほかなりません。感謝だけではなく、神様の御霊がさらに若やぎ、力強く神威を発揮されることを願って、人々は神様を祭ってきたわけです。

山岡 日本文化の奥深さ、深淵さを感じさせるお話です。奉ることが日本文化の特徴だとすれば、神様へのお供え物をどのように用意するかということも重要な問題になってきますね。

小堀 これも日本文化を考えるうえで欠かせない視点です。伊勢神宮では年間一五〇〇回のお祭りを行っていますが、お供え物は多く自ら生産しています。

お米は神宮神田で収穫されたものですし、お塩は一見町の御塩浜、御塩焼所、御塩殿など神宮直轄の施設で古式にのっとって生産されます。また、お供えに使う素焼きの

土器も、神宮御料土器調製所で作ります。

神宮式年遷宮でお宮に収められる御装束神宝も奉るものです。

御装束神宝とは、社殿内を飾り立てる奉飾品や服飾の「御装束」と、武具をはじめとした調度の「神宝」で成り立ちます。御装束は五二五種類、一〇八五点、神宝は一八九種類、四九一点にも及びます。いずれも神宮式年遷宮が始まる約二三〇〇年前に、日本人にとって最も美しいと考えられた品々です。

今でも一点、一点、人間国宝クラスの名工、名匠が製作するのですが、当代最高の芸術作品と言つていいほどのすばらしいものです。平安時代初頭と同じ技術を用いることを原則にしていますが、特に今回の神宮式年遷宮では、化学染料の普及で二二回ほど途絶えていた植物染料も復活させることができました。

山岡 そうした神宝類は、実際に私たちも拝見できるのでしょうか。

小堀 御装束神宝は二〇年間、お宮の中に納められます。その後、さらに二〇年間西宝殿に納められますから、実際に皆さん

が見ることができるのは四〇年後です。

それは、製作にあたった職人も同様です。いずれも長い年月をかけて製作するので、一度納めたら職人本人も四〇年間は目にするのができません。

さらに、職人の名がそれらの製作物に刻まれることもあります。職人たちは自分の名前はそこに残らないことを自覚しながら、しかし最高の仕事を仕上げて、神様に奉るのです。

山岡 自ら丹精を込めて作り、その生産物を神様にお供えする。そのことにひたすら徹してきたところに、日本人の民族としての特徴があるように感じました。

小堀 同時に、そこに日本人特有の労働感が色濃く出ているように思います。古来日本人にとって労働とは、神様と共に行う行為でした。

神宮式年遷宮で新しいお宮を建てるためには、山からご用材を伐り出さなければいけません。その際、山に入るにあたっては、必ず神様の許可を得ます。山の神様に対して、新鮮な食べ物をお供えて、おまつりしてきたわけです。

それが現在では「山口祭」として継承されているわけですが、このときには「今から木を伐らせていただきます。しかし、本末は神様にお返しし、中間はいただきます」と祝詞をあげます。

このことから、古代の日本人に、所有の概念がなかったことは明らかです。山に生えている木々は、神々のものですから、まずその許しをいただく。そのうえで木を伐り、仕事を行ってきました。こうしたことを理解することができれば、わが国の古代史を理解することはできません。

日本人の勤勉さは、農耕によって培われたと言われますが、私たちの祖先は神々と共に田を耕し、そのことに生きがいを感じていたのです。これは、ある意味非常に平和的な考え方でもあるのです。

収奪・支配ではなく自然の循環に沿って生活を営んできた日本人

山岡 どういうことでしょうか。

小堀 ある遊牧民族を考えてみましょう。彼らの財政基盤は羊です。羊を一ヘクターで飼っているときには一〇〇人が生活で

山岡 三子さん



きたとします。そこで、一〇〇〇人を養おうとすると、一〇倍の土地を求めて、侵略や略奪を始めます。しかし、大地に根を下ろして、神々と共に自ら生産し、それを奉る日本の場合にはこうした考えとは対照的で、耕す面積に限界があるので侵略や略奪とは無縁の文明と言えます。

さらに、日本文化の特徴を挙げるとしたら、大きな自然の循環と共に生活を営んできたということも言えると思います。その象徴が木を伐り、木を植える文化です。

事実、伊勢神宮が所有する「神宮宮域林」に九〇年前に植樹した檜が、今回の神宮式年遷宮では「用材」として使われました。こ

の三〇〇年ほどは、適材が不足したために木曽檜を使用してきましたが、今回は全体の五分の一ほどを宮域林から供給することができました。

山岡 日本人は適切に山の手入れをしながら、森林資源を上手に利用して暮らしてきた民族なのですね。

里山はその典型と言えるのかもしれませんが。そうした木を伐って、植える文化はいつごろから始まったのでしょうか。

小堀 その淵源は弥生時代にあるのではないかと思います。山で仕事をするには豊富な食料が必要で、そのためには、水田から得られる穀物は欠かせなかったのだと思います。日本の文明の歩みの中で、最も劇的に変化した時代は、一万年続いた縄文時代から弥生時代に切り替わるときでした。

この時期はいわば大開発の時代です。学者によっていろいろな説がありますが、遺跡から判断すると、九州辺りで始まった水田農耕が二、三百年で東北地方まで伝わったと考えられ、これは当時とすれば、猛烈に速いスピードです。

では、水田をつくり、稲を栽培すること

で、私たちの祖先の暮らしはどのように変わったかという点、余剰生産物ができて、おそらく家族が食べる以上の食料を収穫することができたのではないかと思います。同時に、この食料を生かして、山を手入れするようになったのではないのでしょうか。

水田では米をつくり、海を育て、森を育て、木を育て、お宮を建立する

山岡 その意味では水田農耕の登場は、日本人にとって決定的な出来事だったとも言えますね。

小堀 ええ。さらに、水田農耕は非常に優れた農法で、小麦のように土地を休ませる必要もなく、毎年のように循環的に耕作することができま

す。また、畑のように塩類が集積する心配もありません。水田の下を流れるゆるやかな地下水によって、塩類を海に流してくれるからです。これが海にとって養分になりますから、水田が海を豊かにしたともいえるわけです。

つまり、日本人は、水田で米をつくることで、海を育て、森を育て、その森から木

をいただいて、お宮を建立し、神様に奉るようになった。

そのように、大きな自然の循環の流れに沿って、日本人の暮らしが営まれてきたわけです。循環の中に永遠性を実感する文明なのです。

一万年にわたる縄文の森の記憶

山岡 ということは、私たちの生活様式や文化も、水田農耕が始まった弥生時代の影響を濃厚に受けているわけですね。

小堀 そのとおりです。現在、神々をおまつりする際にお供えされる品々の多くは、



小堀 邦夫氏

お米や、お米からつくられる飯、餅、酒などが中心です。

これらは弥生時代から始まるものですから、その意味では、神道は弥生時代にルーツをもっていると言えますし、弥生文化の継承こそが、神道の最大の特徴と考えることもできるでしょう。

ただし、弥生時代以前に、およそ一万年にわたってわが国の土着の民として生きてきた縄文人、さらには彼らが築いた縄文文化の存在も無視できません。やがて、縄文文化は水田による安定した生活の中で培われた弥生文化に吸収されたことは事実ですが、弥生文化こそがわが国の基層文化のすべてであるとの考えは、少々一面的な見方だと思っています。

縄文時代と弥生時代との間に大きな変化があったとはいえ、そこに断絶があったわけではありません。

実際、今でも私たちの暮らしには、縄文時代の名残がいろいろあるのですよ。

例えば、中秋の名月です。今では、十五夜のお月さんに餅団子をお供えするのが一般的ですが、古くは里芋をお供えする習慣

がありました。私が生まれ育った和歌山市の漁村では、どの家でも窓辺にススキと里芋をお供えしていたものです。これはどう考えても弥生時代のお祭りとは言えません。

事実、近年の植物生態学の研究成果により、縄文人が主として山芋や里芋、堅果類を常食にしていたことが徐々にわかってきました。そのことを考え合わせると、里芋をお供えした中秋の名月は、縄文時代から続くお祭りとするのが適当でしょう。

さらに、神社を取り囲むように形成された鎮守の森も縄文時代からの伝統です。

山岡 神社自体は、弥生文化から生まれた代表的なものと考えていましたから、それは驚きです。

小堀 縄文人が生活していた場所は、基本的に森の中でした。ときおり海辺に出かけては、焼きウニなどを食べていたことが遺跡から明らかになっていますが、海岸近くは台風や高波の影響を受けますから、縄文人が生活するには適しませんでした。

したがって、縄文人とは森の民だったということができると思います。当然、彼らは自分たちが信じる神様を、森の中でおま

つりしていました。その後、弥生時代に入り、林や森がどんどん水田化し、お祭りもより盛大なものになっていきます。ここで問題が起きます。

それは共同体のお祭りを行う場所をどこに求めるかということでしたが、弥生人はごく自然に、森に行き着きました。

それは一万年にわたる縄文の森の記憶があったからにほかなりません。縄文人が弥生人に同化し、森から離れた生活を送るようになってでも、森で神様をまつる伝統が鎮守の森として現代まで受け継がれたのです。

山岡 こうした日本独自の文化や考え方をどのように若い人たちに伝えていくか、広めていくかということも、非常に大切な問題だと思います。

小堀 近年は若い人の間でも、神宮や日本文化に関心をもつ人が増えてきました。おそらく東日本大震災の影響でしょう。

あの震災を契機に、自分たちの国とはいったいどういう国なのか、自分たちはどのように生きていくべきなのかを自問するようになったのだと思います。

そこで、伊勢神宮を訪れば、何かきつ

かけが見つかるのではないかと考える人が増えたのではないでしょうか。

私の持論ですが、こうしたことは、一方的に教えようとしても効果はないと思います。実際に神宮を訪れ、何かを感じ取ってもらうことが大切です。論理的に説明をしても、自分の心で感じ取らなければ、

得心することはないからです。そもそも伊勢神宮に息づく精神文化をすべて説明することは不可能です。自分自身で問いをもつて答えを探すことに意味があるのですから、ぜひ多くの人に、神宮に身を置いて、ここにしかない空気や感覚を感じ取ってほしいと思います。

「進化」ではなく、心の「深化」を

山岡 小堀さんご自身も、お若いときにそうした経験や考えをもたれたのでしょうか。

小堀 もともと私自身が大学院で国史学や神道学を学び、やがて神職の道に進んだのも、伊勢神宮に対して特別な思いを抱いたからです。

私が一〇代のとき、故郷の和歌山市は開発によって深刻な公害に悩まされていました。多くの反対署名があつたにもかかわらず、海の大規模な埋め立て工事も行われました。そのときに自分の故郷がぼろぼろにされていくつらさをつくづく味わいました。一方で、自分自身はどのような人生を歩むべきか、懸命に考えました。そのときに決意したのが、自分は絶対に現代文明を推進する側に回らないということでした。

さらに、現代文明はやがて行き詰まり、反省される時代がくる、そのときに、日本人が救われる指標が、必ずやこの伊勢神宮にあると確信したのです。今でもそのように信じています。

私は一九九七年にアメリカのハーバード大学で「Yayoi-Replicator」(神宮の本質)と題する講演をしました。その際に提起したのも、やはり現代文明やアメリカの政策に対する問い直しでした。

アメリカでは、フロンティア精神が重んじられていますが、その考えは、結局は誰かが誰かを支配すること、収奪することにつながっているのではないかと懸念をお話し

しました。

山岡 第六二回神宮式年遷宮はまだ続いていますが、次の遷宮に向けて抱負をお話してください。

小堀 日本人全体が「進化」ではなく、どれだけ心の「深化」ができるか。そこに私は着目しています。

特に、若者たちにはますますって感受性を高めてほしいですね。神宮には、当代最高の芸術作品を展示した神宮美術館も設置しています。絵画であれ工芸であれ、じっくりと作品を鑑賞し、日本人の美意識の大きさ、深さに接してほしい。

さらに、言葉にももっとより敏感になってもらいたいですね。といっても難しく考える必要はありません。日頃から「飯食いに行こうか」ではなく、「ご飯を食べに行こうか」と丁寧に話すようにする。

「食べる」とは、もともと「食ぶ」という動詞から発した言葉で、元来は「たまる」という意味がありました。そのような言葉の成り立ちを知ると、いかに「食う」と「食べる」に違いがあるか、そして日頃の言葉遣いが大切であるかも理解できるで

しょう。

古代の形式を一切変えずに 日本の精神文化を継承し続けるのが使命

山岡 伊勢神宮の今後のあり方についてはどのようにお考えでいらっしゃいますか。

小堀 古代にあった形式をそのままの形で次の世代に伝えることが何よりも重要です。「こうしたほうがいいのではないか」といった新しい提案や考えは一切加えてはいけません。昔のままの形で次の世代に引き継いでいくことが私たちの重要な使命ですし、そこにこそ神宮の意義があるので。

もうお亡くなりになりましたが、ある植物生態学の研究者は、研究に行き詰まると原始林が広がる大台ヶ原の山奥に赴かれたようです。そこで、一週間も一〇日もこもって一心に観察を続けていると、探し求めていた答えが見つかったというんですね。伊勢神宮はまさにそうした存在なのではないかと思います。時代や流行とは一線を画し、そこを訪れた人が、日本の精神文化などについて何かしらの発見をする。そうした普遍的な場所が伊勢神宮なのです。

何か一つでも、手を加えてしまったら、それができなくなってしまう。しっかりと精神文化を継承し続けていくことが重要なのです。

山岡 二〇二〇年のオリンピックの開催に伴い、これから多くの外国人が日本を訪れることになると思います。その際に、おもてなしの一環として、日本に備わる精神文化や考え方を外国の方に伝えることも大切だと思います。

小堀 誰が来ても胸を張れる独自の文化が日本にはあるということを、まず日本人自身が認識することが大切です。そのうえで、海外の人にもそのすばらしさを伝えたいのではないのでしょうか。

ただ、あまり無理をする必要はありません。神宮でも年間二五〇〇回にわたってお祭りを行っていますが、特に誰かを招待してにぎにぎしく行うようなことはしていません。神職が肅々と神様をまつる行為を繰り返し繰り返し行っただけです。そのくらいのスタンスでいい。しかし、問われればしっかりと答えられるだけのものは、身につけておくべきだと思います。